

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第 71 回

キク科植物の花 (2)

～ キク科キク^あカ^か亜科の植物 ① ～



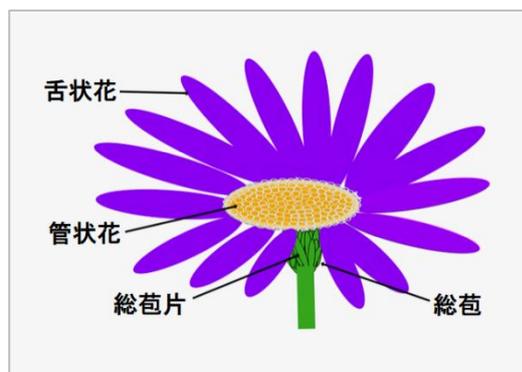
もとよし ふさお
本吉 総男

2023 年 6 月

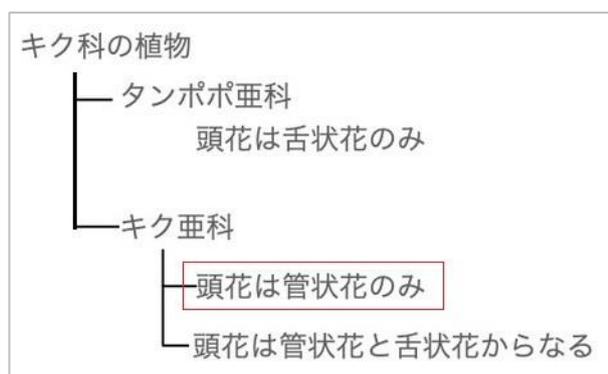
前回(第70回)「[キク科植物の花\(1\)](#)」

に、キク科植物の花の基本構造を模式図で示しました。本編を読み進める上での参考として、その図を再度載せます。

また、キク科の植物は、主としてタンポポ亜科とキク亜科に大別されること、タンポポ亜科の頭花は舌状花のみで構成されること、キク亜科の頭花は管状花(筒状花)をもつことについて説明しました。さらに、キク亜科には管状花のみをもつものと、舌状花と管状花の両方をもつものがあることにも言及しました。タンポポ亜科については前回紹介しました。今回はキク亜科のうち、右の図中、赤枠で囲んだ管状花のみをもつ植物のいくつかを紹介します。



キク科植物の花(頭花)の基本構造



キク科植物の分類

1 ノアザミ、ノハラアザミなど(アザミ属)

アザミ属の植物の頭花には舌状花がありません。すべて管状花によって構成されています。また、それぞれ総苞そうほうに特徴があります。

ノアザミは本州、四国、九州に分布する多年草で、5~8月頃に咲きます。みずき野周辺では、守谷市北園森林公園の草地で見ることができますが、そこでの写真を撮っていないので、つくばみらい市小絹地区で撮った写真を載せます。ノアザミの総苞片そうほうへんは密着し、短いけれど鋭い棘とげをもっています。



ノアザミ 5月上旬 つくばみらい市小絹地区

ノハラアザミは本州の関東、中部以北に分布する多年草で、ノアザミと似ていますが、そうほうへん総苞片は密着せず、斜め上を向きます。それらの先端はとげじょう棘状です。

トネアザミは関東地方に多く見られる多年草で、中部地方南部でも見られるようです。とうか頭花の多くは横向き、または斜め下向きで、かんじょうか管状花が長いなどの特徴があります。



ノハラアザミ 10月中旬 取手市貝塚地区

アメリカオニアザミは名称からアメリカ原産と思われがちですが、ヨーロッパ原産の一年草または越年草です。現在はアジア、アフリカ、アメリカ、オセアニアに帰化し、日本へは北アメリカから侵入したようです。葉には鋭いとげ棘があり、そうほうへん総苞片も鋭いとげ棘になっています。みずき野周辺ではあまり見かけませんが、本町地区に生えていたものを写真に撮りました。



トネアザミ 9月下旬 取手市貝塚地区



アメリカオニアザミ 6月中旬 守谷市本町地区

2 アザミに似た植物たち

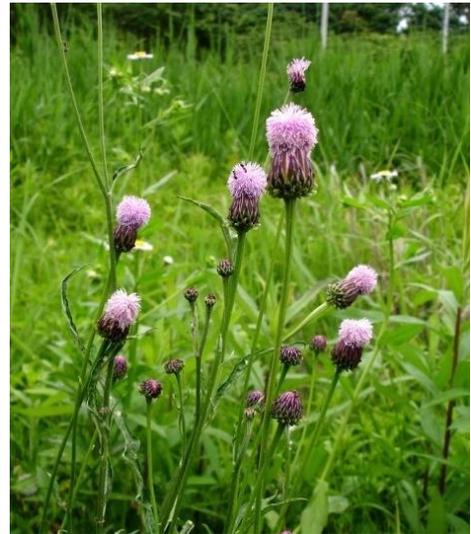
ヒレアザミ(ヒレアザミ属)はユーラシア原産の一年草で、古代に日本に侵入したようです。アザミとよく似ていますが、葉のつけ根が茎に沿って固着しており、この部分を「ヒレ」と呼んでいます。ヒレハリソウ(コンフリー)やヒレタゴボウといった植物の名前にある「ヒレ」も同じ意味です。ヒレアザミの葉には「ヒレ」の部分



ヒレアザミ 4月中旬 守谷市高野地区

含めて鋭い棘とげがあり、花は5~7月頃咲き、総包そうほうの中部から下部そうほうへんの総苞片もそり返って鋭い棘とげになっています。

キツネアザミ(キツネアザミ属)は本州から沖縄までの日本列島と東アジア、インド、オーストラリアに分布する越年草で、日本には古代に侵入したようです。花期は5~6月頃でアザミに似た花を咲かせます。アザミに似ているがアザミではないので、キツネアザミと命名されたようです。



キツネアザミ
6月上旬 取手市上高井地区

アーティチョーク(チョウセンアザミ属)は地中海沿岸地方原産の多年草です。高さは1~2メートル程になり大きなアザミという感じです。取手市貝塚地区で自生しているアーティチョークに出会いました。自生するような植物ではないと思うので、ちょっと不思議でした。苞葉は褐色ほうようになっていて、食べ頃は過ぎているように思いました。



アーティチョーク
7月上旬 取手市貝塚地区

アーティチョークは、主として若い頭花とうかの苞葉片ほうようの下部に貯蔵されている澱粉質を食用にします。50年も前のことですが、私はパリのレストランでアーティチョークを食べたことがあります。メニューにアーティチョークを見つけ、一人だったのでいささか勇気がいりましたが、滅多にないチャンスと思って注文しました。皿に乗って出てきたのは、ゆでた総包そうほうで、直径12センチ程の巨大なものでした。総苞片は大きい割に、食べられる部分のごく少ないのです。味ははっきり思い出せませんが、百合根に似ていたように思います。食後、皿の上に山積みになった苞葉片ほうようの残骸をあとにして、勘定を済ませ、そそくさ店を出ました。

ゴボウ(ゴボウ属)はユーラシアに分布する多年草で、高さは1メートル前後です。6~7月頃アザミに似た花を咲かせます。総苞片は総苞から棘状そうほうへんに突き出そうほうています。



ゴボウ 7月中旬 守谷市本町地区

3 フキ(フキ属)

フキは本州から沖縄までの日本列島と東アジアの温帯に分布する多年草です。フキは日本人が食材として好む植物で、ふきのとうは天ぷらや、ゆでて汁物に入れたり、味噌とともにすりつぶして食べたり、生長した葉の茎はきゃらぶき(フキの佃煮)にしたり、煮物にしたりして食べます。父が味噌と共にすりつぶしたふきのとう(ふき味噌)が好きだったので、子供の頃によく食べました。節分前後にふきのとうを見つけると、当時を思い出します。

フキは地下茎を伸ばし、ふきのとうは地下茎から本葉よりはやく地上に現れ、頭花の集まりはとうか苞葉(鱗片葉ともいう)に包まれています。やがて苞葉が開くと、ほうよう総苞に包まれた15~20ほどの頭花が現れます。頭花には舌状花はありません。フキは雌雄異株です。雌株の頭花の中の周辺は雌しべをもつ多数の雌花で、中央には両性花(雌しべと雄しべを持つ花)が存在しますが、両性花は結実しません。雄株の頭花を構成する雌花の花はどれも雄しべと雌しべをつとうか両性花の形をしていますが、この雌しべには本来の機能がなく、雄花はもっぱら雄しべから花粉を放出する役割です。雌花の写真は残念ながら撮っておらず、雄花の写真のみ載せます。



フキノトウ 1月下旬(左)と2月下旬(右) わが家の庭



フキの雄花
3月中旬 守谷市本町地区

なお、フキの亜種にアキタブキがあります。北海道や本州の寒冷地では、葉柄の長さは2メートル、葉の直径は1メートル50センチにもなる巨大なフキです。秋田では大きなアキタブキを野菜として栽培していますが、本州中部で野菜として栽培されているアキタブキの栽培品種はそれほど大きくならないようです。

4 ブタクサとオオブタクサ(ブタクサ属)

ブタクサは北アメリカ原産の一年草で、雌雄同株の植物です。高さは80センチ前後で、花は8~9月頃咲きます。頭花は枝先の長い穂につきます。穂の上部から下部までは雄花の頭花

がつき、その総苞そうほうの中に10個ほど管状花かんじょうかが存在します。雌花は一番下の頭花とうかの下に2~3個つきますが、まったく目立たず、雌花の頭花とうかの中には花がひとつあるだけです。残念ながら花を接写した写真はもっていません。



ブタクサ 8月上旬 取手市貝塚地区



ブタクサ 花穂と頭花
8月上旬 取手市貝塚地区

オオブタクサは北アメリカ原産の一年草で、花期は8~10月頃です。高さ2~3メートルの大きな植物で、ブタクサよりはるかに大きく、穂も長く、雌雄同株で雄花、雌花ともブタクサと同様です。



オオブタクサの群生
8月上旬 守谷市本町地区



オオブタクサ 花穂と頭花
8月上旬 守谷市本町地区

5 ヒヨドリバナとフジバカマ (ヒヨドリバナ属)

ヒヨドリバナは在来種で、林の中やへりなど、多少薄暗い場所に見られます。頭花とうかが小さく、群がって咲くので、多くのキク科植物と様子が違います。次ページの写真でわかるように、総苞そうほうの中には5つ前後の管状花かんじょうかがみられます。

フジバカマは本州(関東地方以西)、四国、九州に分布し、古代に中国から入ったという説があります。河原やその近くに生える多年草ですが、環境省により、準絶滅危惧種に指定されて

います。庭や公園で栽培されているフジバカマはよく見かけますが、これらは改良された栽培品種ではないかと思えます。以前、守谷城址公園でも見ましたが、原種か栽培品種かは不明です。その写真がないので、参考として日光霧降高原で撮った写真を載せておきます。この植物も原種か栽培品種かはわかりません。花の構造はヒヨドリバナと似ています。



ヒヨドリバナ 7月下旬 守谷市本町地区



参考写真 フジバカマ 8月下旬 日光霧降高原

6 ヨモギ (ヨモギ属)

ヨモギは本州、四国、九州に分布し、道ばたや草原にごく普通に見られる多年草で、若々しい葉は春の象徴ですが、夏がすぎ秋がくる頃になると、まさに雑草に変貌します。花は8~10月頃に咲きますがこれも雑草の花という感じとうかです。頭花は長い穂ぜつじょうかに沿って多数つき、舌状花かんじょうかはなく、管状花のみで構成されます。



ヨモギの葉 4月上旬 みずき野第2調整池



ヨモギの頭花 10月下旬 みずき野第2調整池

余談:ヨモギに因んで

ヨモギは草餅を作るために、春の若々しい葉が摘まれます。草餅は濃い緑と香りが楽しめる春の味覚で、3月3日に食べる習慣があり、俳句では、蓬よもぎは春の季語です。

風吹いて 持つ手にあまる 蓬よもぎかな 水原秋櫻子

平安時代には、5月5日の端午の節句の前夜にショウブに添えてヨモギで屋根を葺ふく習慣があったそうです。枕草子は次のように記しています。

節せちは五月にしく月はなし。菖蒲そうぶ・蓬よもぎなどのかをりあひたる、いみじうをかし。
九重ここのへの御殿ごてんの上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにし
げく葺ふかんと葺ふきわたしたる、なほいとめずらし。いつかは、ことをりにさはしたりし。

(注)「いつかは、ことをりにさはしたりし。」いつ、他の折に、そのようなことをしたのだろうか。

ヨモギにはまた迷惑な雑草というイメージもあります。源氏物語の「蓬生よもぎふ」の巻にはその様子がありありと描かれています。「蓬生よもぎふ」は源氏物語の本筋から少し離れた巻ですが、蓬よもぎ、葎むぐら(おそらくカナムグラ)、浅茅あさち(短かいチガヤ)などの雑草が登場するので、私には興味のある巻です。少し詳しく述べてみましょう。舞台は故常陸宮親王ひたちのみやしんのうの邸宅で、親王の死後、娘の末摘花すえつむはなが住んでいます。

末摘花すえつむはなと光源氏とのいきさつは「末摘花すえつむはな」の巻に詳しく述べられています。末摘花すえつむはなは常陸宮ひたちのみやが晩年にもうけた身分の高い姫君ですが、源氏物語に登場する美人揃い女性の中では例外的な不美人。とりわけ鼻が長く、その先が赤いという残念な容貌です。源氏はこの姫君を控えめな可愛い人と想像し、何度も人を介して会いたい旨を告げるのですが、返事がありません。しかし、ある雪の朝、初めて源氏の呼びかけに応えて姿を見せたのですが、姫君の容貌を見て啞然すえつむはなとします。末摘花の名は源氏の歌に由来します。

なつかしき 色ともなしに 何にこの すえつむはなを 袖にふれけん

この歌は「どうして私は赤い鼻の娘に触れてしまったのだろう」ということです。^{すえつむはな}末摘花は^{べにはな}紅花の異称です。

その後、源氏はこの姫君を気の毒に思い、何かと世話をするようになります。

^{よもぎふ}「蓬生」は^{すえつむはな}「末摘花」の後日談です。^{すえつむはな}「末摘花」は源氏18歳の正月頃から19歳の正月まで、^{よもぎふ}「蓬生」は源氏28歳の秋から翌年4月までですから、約10年の隔たりがあります。その隔たりの間に、源氏は大事件に遭遇します。

源氏25歳の頃、右大臣が当時宮廷内で最も権勢を誇る人物でした。源氏は、右大臣の娘で、当時、^{ないしのかみ}内侍司(帝のそばに仕え、雑事を行う後宮のひとつで、職員は全て女性)の長官であった^{おぼろづきよ}朧月夜と密会し、その現場を右大臣に目撃されてしまいます。これにより^{すぎくてい}右大臣や帝(朱雀帝)の母である弘徽殿大后の怒りを買ひ、源氏は都を離れざるを得なくなり、須磨に移り、その後、明石入道(播磨国に国司として都を離れ、明石に居残って財をなした人物)の助力を得て^{あかしのうえ}明石に移ります。この地で、源氏は明石入道の娘(明石上)と結ばれます。この頃、都では^{すぎくてい}右大臣が亡くなり、^{あかしのうえ}朱雀帝は源氏を宮廷に召喚します。源氏は帰京後、^{あかしのうえ}明石上を都に呼びよせます。源氏と^{あかしのうえ}明石上との間には、^{とうぐう}のちに春宮(皇太子のこと)の妃となる^{あかしのひめぎみ}娘(明石姫君)が生まれます。そして源氏の栄光の時代が始まります。

脱線しましたが、^{よもぎふ}「蓬生」の巻に戻ります。^{すえつむはな}末摘花は^{ひたちのみやしんのう}常陸宮親王の娘ですから、身分は高いのですが、父は亡くなり、頼りになる源氏は都落ちしていたため、源氏の庇護は受けられず、^{すえつむはな}零落し、お付きのものたちのほとんどが、^{すえつむはな}末摘花のもとから離れて行きます。庭園は荒れ放題。その状態を原文は次のように表現しています。

^{あさぢ}浅茅は、庭の面も見えず、^{よもぎ}しげき蓬は、軒を争ひて生ひのぼる。^{むぐら}葎は、西・東の御門を閉ぢこめたるぞ、たのもしけれど(用心には都合がいいけれど)。崩れがちな垣を、馬・牛などの踏みならしたる、道にて、春・夏になれば、(牛馬を)^{あげまき}はなち飼う^{あげまき}總角(總角は少年の髪型的一种であるが、ここでは牛馬を扱う牧童をさす)の心さへぞ、^{あきれたさまである}めざましき(あきれたさまである)。

源氏は帰京後もしばらくは^{すえつむはな}末摘花を気に掛けることもなかったのですが、ある日、愛人のひと^{はなちるさと}り、^{ひたちのみや}花散里を訪問する予定で出かけたところ、途中で荒れ果てた^{ひたちのみや}故常陸宮の邸宅を目にし、

すえつむはな
末摘花に面会し、今まで気にもかけなかったことを後悔するとともに、人をして、蓬よもぎなどの雑草を払い、壊れた垣根も修復しました。源氏が再び世話をするようになると、それを聞きつけ、散り散りに去っていった人々も戻ってくるようになりました。末摘花はこの邸宅に2年ほど過ごしていましたが、その後、二条院(当時の源氏の住まい)の東にある東の院(源氏が父帝から譲渡された邸宅)に、源氏のはからいで移り住むことになりました。

ヨモギに関するもうひとつの話題は、灸きゅうの材料の艾もぐさのことで、艾もぐさはヨモギの葉を乾燥させて、葉の裏についている毛を集めたもので、綿状にしたものに火をつけて灸きゅうとして使います。このことから、モグサはヨモギの別名でもあります。

かくとだに えやはいふきの さしもぐさ草 さもしらじな もゆる思ひを

ふじはらのさねかた
(藤原実方(後拾遺和歌集))

百人一首にも入っている有名な歌です。言い回しが複雑なので解釈が難しいですが、

「伊吹山のもぐさのように、あなたに燃ゆる思いをいただいているのですが、言い出すことができないので、あなたは知らないでしょうね」

と訳せばいいでしょうか。

ヨモギは地味な姿なのに、なにかと話題の多い植物です。